

「言葉で支える思想面」での ドイツ受容の役割をとらえる

日本独自の近代美術の歴史に切り込む論考

安松みゆき



日本の近代美術とドイツ
美術批評の誕生と木版画の再興

高村光太郎『緑色の太陽』、『月映』、『白樺』の美術史的位置をめぐって、その思想的背景と表現形式を、ドイツの美術史と対照的に考察する。また、ドイツの美術史と対照的に、日本の近代美術におけるドイツ受容の役割を論じる。

日本の近代美術に対する西洋の影響は、これまで実作品に目を向けてフランス中心に語られることが多かったが、野村優子による『日本の近代美術とドイツ』では、ドイツの果たした役割が扱われている。論じられるのは美術の創作それ自体や美術家による専門的議論ではない。文芸誌における論評の果たした役割に注目するものであり、そうした批評の役割が後退して、やがて美術史家が登場することを指摘する。まさに日本独自の近代美術の歴史に切り込む論考といえる。

扱う時代は明治末期から大正期の1910年代。高村光太郎や武者小路実篤ら、さらにドイツの美術批評家マイヤー・グレーフェに光が当てられた。日本の文学者たちは文芸雑誌においてさかんに西洋美術批評を行った。その際にかからの批評に影響を与えたのが、マイヤー・グレーフェの著書『近代芸術発展史』に

おけるドイツ美術の思想であった。このことはすでに既知の事実であるものの、具体的な考察はなされてこなかった。著者は等閑に付されてきたマイヤー・グレーフェの『近代芸術発展史』を取り上げて具体的に美術論を検討することでその実態を明らかにした。

本書において論考の出发点になったと著者が述べるのは、高村光太郎の『スバル』に掲載された「緑色の太陽」である。ドイツ語を多用しつつ若い芸術家たちを自己の表現に向かわせた高村の概念を手掛かりとして、著者はドイツ受容の実情を考察するに当たっている。実はこの論考の出发点はまた、著者の結論を象徴している。つまり、高村の批評は美術史家が登場する前、美術家と文学者が美術と文学の境界のない領域のなかで文芸雑誌をとおして自由に行き来をし、それによって日本の近代美術が西洋の新しい美術を受容できた一面を物語っているのである。

本書は序章、本文4章、および終章からなる。まず序章では御雇外国人にはじまり、ドイツに留学した原田直次郎、巖谷小波、山田耕筰、澤木四方吉が紹介される。第一章では、雑誌『スバル』を取り上げて、そのなかで美術批評が文学者によって生み出されたことが解説される。その一方でそうした美術批評の根幹をなしたのは、ドイツ人美術批評家マイヤー・グレーフェからの影響によるものであることが確認される。第二章ではそのマイヤー・グレーフェの代表的な著作『近代芸術発展史』が注目される。この著書は当時の芸術を指す若者に愛読されていた。著者は同書における美術論を丁寧に検討して、マイヤー・グレーフェが「美術著述家」として情熱あふれる語り口で主観的に印象主義やポスト印象主義を紹介したことが、美術史家の存在のなかった時代に文学者に美術批評を担わせる結果になったことを指摘した。第三章では、文学と美術の合体した『白樺』で紹介されたマイヤー・グレーフェの「ゴッホ論」が武者小路実篤に影響を与えたことが改めて確認され、第四章では、ドイツの美術雑誌をとおした日本での受容として、木下左太郎の

評が文学者によって生み出されたことが解説される。その一方でそうした美術批評の根幹をなしたのは、ドイツ人美術批評家マイヤー・グレーフェからの影響によるものであることが確認される。第二章ではそのマイヤー・グレーフェの代表的な著作『近代芸術発展史』が注目される。この著書は当時の芸術を指す若者に愛読されていた。著者は同書における美術論を丁寧に検討して、マイヤー・グレーフェが「美術著述家」として情熱あふれる語り口で主観的に印象主義やポスト印象主義を紹介したことが、美術史家の存在のなかった時代に文学者に美術批評を担わせる結果になったことを指摘した。第三章では、文学と美術の合体した『白樺』で紹介されたマイヤー・グレーフェの「ゴッホ論」が武者小路実篤に影響を与えたことが改めて確認され、第四章では、ドイツの美術雑誌をとおした日本での受容として、木下左太郎の

評が文学者によって生み出されたことが解説される。その一方でそうした美術批評の根幹をなしたのは、ドイツ人美術批評家マイヤー・グレーフェからの影響によるものであることが確認される。第二章ではそのマイヤー・グレーフェの代表的な著作『近代芸術発展史』が注目される。この著書は当時の芸術を指す若者に愛読されていた。著者は同書における美術論を丁寧に検討して、マイヤー・グレーフェが「美術著述家」として情熱あふれる語り口で主観的に印象主義やポスト印象主義を紹介したことが、美術史家の存在のなかった時代に文学者に美術批評を担わせる結果になったことを指摘した。第三章では、文学と美術の合体した『白樺』で紹介されたマイヤー・グレーフェの「ゴッホ論」が武者小路実篤に影響を与えたことが改めて確認され、第四章では、ドイツの美術雑誌をとおした日本での受容として、木下左太郎の

評が文学者によって生み出されたことが解説される。その一方でそうした美術批評の根幹をなしたのは、ドイツ人美術批評家マイヤー・グレーフェからの影響によるものであることが確認される。第二章ではそのマイヤー・グレーフェの代表的な著作『近代芸術発展史』が注目される。この著書は当時の芸術を指す若者に愛読されていた。著者は同書における美術論を丁寧に検討して、マイヤー・グレーフェが「美術著述家」として情熱あふれる語り口で主観的に印象主義やポスト印象主義を紹介したことが、美術史家の存在のなかった時代に文学者に美術批評を担わせる結果になったことを指摘した。第三章では、文学と美術の合体した『白樺』で紹介されたマイヤー・グレーフェの「ゴッホ論」が武者小路実篤に影響を与えたことが改めて確認され、第四章では、ドイツの美術雑誌をとおした日本での受容として、木下左太郎の

評が文学者によって生み出されたことが解説される。その一方でそうした美術批評の根幹をなしたのは、ドイツ人美術批評家マイヤー・グレーフェからの影響によるものであることが確認される。第二章ではそのマイヤー・グレーフェの代表的な著作『近代芸術発展史』が注目される。この著書は当時の芸術を指す若者に愛読されていた。著者は同書における美術論を丁寧に検討して、マイヤー・グレーフェが「美術著述家」として情熱あふれる語り口で主観的に印象主義やポスト印象主義を紹介したことが、美術史家の存在のなかった時代に文学者に美術批評を担わせる結果になったことを指摘した。第三章では、文学と美術の合体した『白樺』で紹介されたマイヤー・グレーフェの「ゴッホ論」が武者小路実篤に影響を与えたことが改めて確認され、第四章では、ドイツの美術雑誌をとおした日本での受容として、木下左太郎の

評が文学者によって生み出されたことが解説される。その一方でそうした美術批評の根幹をなしたのは、ドイツ人美術批評家マイヤー・グレーフェからの影響によるものであることが確認される。第二章ではそのマイヤー・グレーフェの代表的な著作『近代芸術発展史』が注目される。この著書は当時の芸術を指す若者に愛読されていた。著者は同書における美術論を丁寧に検討して、マイヤー・グレーフェが「美術著述家」として情熱あふれる語り口で主観的に印象主義やポスト印象主義を紹介したことが、美術史家の存在のなかった時代に文学者に美術批評を担わせる結果になったことを指摘した。第三章では、文学と美術の合体した『白樺』で紹介されたマイヤー・グレーフェの「ゴッホ論」が武者小路実篤に影響を与えたことが改めて確認され、第四章では、ドイツの美術雑誌をとおした日本での受容として、木下左太郎の

評が文学者によって生み出されたことが解説される。その一方でそうした美術批評の根幹をなしたのは、ドイツ人美術批評家マイヤー・グレーフェからの影響によるものであることが確認される。第二章ではそのマイヤー・グレーフェの代表的な著作『近代芸術発展史』が注目される。この著書は当時の芸術を指す若者に愛読されていた。著者は同書における美術論を丁寧に検討して、マイヤー・グレーフェが「美術著述家」として情熱あふれる語り口で主観的に印象主義やポスト印象主義を紹介したことが、美術史家の存在のなかった時代に文学者に美術批評を担わせる結果になったことを指摘した。第三章では、文学と美術の合体した『白樺』で紹介されたマイヤー・グレーフェの「ゴッホ論」が武者小路実篤に影響を与えたことが改めて確認され、第四章では、ドイツの美術雑誌をとおした日本での受容として、木下左太郎の

評が文学者によって生み出されたことが解説される。その一方でそうした美術批評の根幹をなしたのは、ドイツ人美術批評家マイヤー・グレーフェからの影響によるものであることが確認される。第二章ではそのマイヤー・グレーフェの代表的な著作『近代芸術発展史』が注目される。この著書は当時の芸術を指す若者に愛読されていた。著者は同書における美術論を丁寧に検討して、マイヤー・グレーフェが「美術著述家」として情熱あふれる語り口で主観的に印象主義やポスト印象主義を紹介したことが、美術史家の存在のなかった時代に文学者に美術批評を担わせる結果になったことを指摘した。第三章では、文学と美術の合体した『白樺』で紹介されたマイヤー・グレーフェの「ゴッホ論」が武者小路実篤に影響を与えたことが改めて確認され、第四章では、ドイツの美術雑誌をとおした日本での受容として、木下左太郎の

（別府大学文学部教授）